
バカとおサルと召喚獣

司馬遼太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとおサルと召喚獣

【NZコード】

N9675L

【作者名】

司馬遼太

【あらすじ】

文月学園で「試験召喚システム」を利用した動乱が今、幕を開ける！

吉井明久・坂本雄一…その他本編登場人物が大暴れ！

バカとテストと召喚獣の一次創作です
主にオリジナルです

第一問（前書き）

どうも始めまして。

司馬遼太という者です。

いつもラノベ等を読んでるダメ学生です。

この作品は司馬遼太の処女作ですので、生暖かい目で見守って下さ

い m () m

第一問

バカテスト

問 「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

「問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるといつも。」

合金の例…ジュラルミン

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目といつ引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

「問題点…ガス代を払つていなかつたこと」

猿飛申助の答え

「問題点…材料の賞味期限がきれいでいた」

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

「合金の例…未来合金（すいごん）（すいごん）」

教師の「メント
すいごん強い」と言われても

桜舞う4月

その桜が舞い散る道を走る少年…

今、物語が始まる

走っていた少年は玄関の前に立っている浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男に気づき挨拶をする

「あ、おはようございます。猿じー鉄人先生。」「猿飛、今、猿人って言わなかつたか？あと、それからさも当然のようになら俺の名前を言ってみる！」

「わかつてますつて」

「ほう、なら俺の名前を言ってみる」

「…えつと、鉄村先生？」

「お前は、去年の担任の名前を忘れるのか！？」「すみません」

「まったく、坂本や吉井ですら覚えている事を忘れるとは…俺の名前は西村だ。よく覚えておけ」

「わかりました」

この西村と名乗った男は、生活指導の鬼で知られる西村教諭。トライアスロンが趣味で、その鍛え上げられた肉体から、通称『鉄人』と呼ばれる

そしてこの西村教諭と話しているとある服装をした少年の名前を『猿飛申助』と言つ。

「それと猿飛、他に何か言う事はないか?」

「えつと…今日も肌が黒くて暑苦しいですね」

「お前には俺に対する罵倒と肌の色の方が重要なのか?普通はます挨拶だろ?」

「あ、そっちか。すみません。気づきませんでした」

「まったく、あと猿飛、今更だが…何故お前は寝間着で登校してくるんだ!」

「寝坊しかけて危なく遅刻しそうになつたので」

「危ないのはお前の頭だ!」

「失礼な、大丈夫ですって、制服一式カバンに入れて持つてきてますから」

「…もういい、ほれ受け取れ」

箱から封筒が出され渡された。

「あ、ありがとうございます」

頭を下げる禮を言つた申助は受け取つた封筒を開け始める。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表するんですか?掲示板とかで大きく張り出してしまえばいいのに」
申助は封筒を開けながら聞く。

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチの学校は世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環つてワケだ」

「へえ、そういうもんなんですかねえ」相槌を打ちながら封筒を開

けていく。

「猿飛、今だから言うがな」

「なんですか?」

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、猿飛は本格的なバカなんじゃないか?』なんて疑いを抱いていたんだ」

「そいつは、大きな間違いですよ。そんな誤解をしているようじゃ、更に、『でくの坊』とか『脳味噌筋肉』なんて渾名をつけられますよ?」

そして封筒の封が切られた

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「それはよかったですね」

相槌を打ちながら封筒の中の紙を出す。

「喜べ猿飛。お前への疑いはなくなつた」

そこには、

『猿飛申助・Fクラス』

「お前はバカだ」

いつして猿飛申助の最低クラス生活が幕が開けた。

第一問（後書き）

初めて、「小説家になろう」で小説を書きましたが、かなり疲れました。

なにせ、初めてで慣れていないので書くのに時間が信じられないほどかかり、間違いだらけで修正に時間がまた信じられないぐらいかかる…といった具合です

正直甘かった

ここまで疲れるとは…

1日一回更新している先生の凄さを感じました。

先ずは、一週間に一回更新を指します！

生暖かい田で見守つて下さい。

意見、感想等ありましたらよろしくお願いします。

第一回（前書き）

意見、感想等あつまいたらよろしくお願ひします

第一問

第一問

- 問 以下の意味を持つことわざを答えなさい
- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
 - 『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喻え』

姫路瑞希の答え

- 『（1）孔法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

猿飛申助の答え

- 『（1）孔法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り目に祟り目』などがありますかね。

土屋康太の答え

- 『（1）孔法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『（1）猿飛申助も木から落ちる』
- 『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

「ちくしょう、鉄人め。バカってはつきり言わなくてもいいじゃないか」

トイレで寝間着から制服に着替えた申助は、鉄人に対する愚痴を言いながら教室に向かつて歩いていている。

「それにしても、さつき見たAクラスの教室は凄かったなあ。設備が、ノートパソコン、個人用アコム、冷蔵庫、リクライニングシート等つてまるで高級ホテルみたいだつたよなあ。いいよなあ」

Aクラスに対する羨みの言葉を言いながら申助はFクラスに急いだ。

「なんだ、この扱いの差は」

Fクラスの前で申助は少し躊躇していた。なぜなら、彼が今立っているドアの前の時点ではAクラスとの差が出ていたからだった。

「ええい、ままよ」

申助はドアを開けた

「ちわーす」

「おう、申助か」

ドアを開けた先には、教壇があり、その教壇にガラの悪そうな野性味のある少年が立っていた。

「雄一、お前もFクラスか」

「そうだ、ついでにこのクラスの代表だ」

「くそ、こんなバカゴリラに負けるなんて…」

「何か言つたか？バカザル」

「誰がバカザルだ！」

「お前だ」

「ムキー！」

この申助をサルと罵倒した少年の名前は『坂本雄一』
申助の悪友で中学の頃は異名を付けられるほど強かつた。

「そういうや、もしかして俺が一番遅かった？でも、ここに一番ふさ
わしい顔がないけど？」

教室を見回してある顔を探す申助

「うん？ああ、明久ならまだ来ていない。遅刻だ」

「ほつ、よかつた。明久に学力で負けたなんて事になつたら生きて
生けそうにないしな」

「同感だ」

「ああ、そうだ。席は？」

「そこらにでも座れ」

「…改めてここが最低クラスって事を思い知らされた」

申助は言いながら席につく。

すると、勢いよくドアが開いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたつ

「早く座れ、このウジ虫（ゴミ虫）野郎」

ドアを開けて入ってきた人物に罵声が飛ぶ

「来てすぐにそれってひどくない？ 雄一に申助

「聞こえないのか？ ああ？」

「黙れ明久、もう一度言わせる気か？」

この明久と呼ばれた少年は『吉井明久』、申助の悪友その2で学力的に学年最低ランクのバカさと、行動力により雄一、申助と共に鉄人に目をつけられている。同時にとある（・・・）称号持ち。

この『吉井明久』、『坂本雄一』、『猿飛申助』の3人が学年で「3バカトリオ」または、「問題児トリオ」として名を馳せており、鉄人に目をつけられている。

「あう……だけど、申助は席についているからともかく、何で雄一が教壇に？」明久が不思議そうに聞く

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がつてみた

「え？ それじゃあー」

「諦める明久、残念な事に、ゴリラがこのクラスの最高成績者だ」

「黙れ、そのゴリラに成績で負けたサル

「誰がサルだ！」

「誰がサルだ！」

「成績で負けた事は認めるんだな…」

「えっと、それじゃ、雄一がこのクラスの代表なの?」

「ああ、そうだ」

雄一はニヤリと笑った

「認めたくはないがな」

申助は嫌そうに溜め息混じりに言つ

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返つて床に座つているクラスメイト達を見下ろす雄一。
クラスメイトは皆椅子がないため床に座つている。

その光景を見た明久が咳く。

「それにしても……流石はFクラスだね」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

不意に背後から霸氣のない声が聞こえてきた。

申助達が振り向くと、そこには、いかにも冴えないオジサンがいた。

「それと席についてもれますか? H Rを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーつす

「はーい」

こうして文月学園2年Fクラスの初日が幕を開けた。

第一問（後書き）

疲れたら

いや～Bクラス戦が遠い！

余りにも量が膨大だったので教室編と自己紹介編にわけました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675/>

バカとおサルと召喚獣

2010年10月10日20時45分発行